

金剛坂里中遺跡発掘調査報告

2004（平成16）年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

多気郡明和町は、三重県内を北流する櫛田川と宮川によって挟まれた洪積台地に位置し、国史跡斎宮跡をはじめとする歴史的遺産が数多く存在し、古来より高い文化を形成してきました。

今回発掘調査を行いました金剛坂里中遺跡は、多気郡明和町字里中に位置し、櫛田川支流の祓川右岸の台地上に立地する遺跡です。平成15年度多気停車場斎明線国補緊急地方道路整備事業に伴い、遺跡の一部が現状変更される部分の記録保存を図ることになりました。調査では、古墳時代から中世までの貴重な成果が得られました。今回得られた成果が祖先の残した貴重な文化財として、明和町における郷土の歴史や文化として伝え、活用されることができれば幸いです。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、明和町教育委員会、県土整備部、松阪地方県民局建設部などの関係機関から多大な御協力と御理解を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

1 本書は、三重県多気郡明和町金剛坂字里中に所在する金剛坂里中（こんごうさかさとなか）遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、下記の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
	調査研究IIグループ　主　　査　　辻本泰宏
	技　　師　　池本浩弥
	技術補助員　川崎志乃
発掘調査作業委託先	(株)中部日本鉱業研究所
調査期間	平成15年5月16日～平成15年8月7日
調査面積	961m ²

3 本書の作成は、上記担当者の他調査研究IIグループが行った。本書の執筆・編集・遺物写真は、辻本が担当した。

4 写真図版の遺物番号は、出土遺物の実測図の番号と対応させてある。

5 本書で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。

SD：溝　　SK：土坑　　SX：方形周溝墓

6 本書で示す方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は6度50分西偏（平成12年、国土地理院）している。

7 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8 調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備チーム、松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会及び地元各位から御協力をいただいた。

本文 目 次

I 前言	1
II 位置と環境	2
III 基本層序と遺構	6
IV 遺物	10
V 結語	12

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 遺跡地形図	5
第3図 調査区位置図	5
第4図 土層断面図	7
第5図 遺構平面図	8
第6図 SX3 平面図・断面図	9
第7図 SX3 周溝内遺物出土状況図	9
第8図 出土遺物実測図	11

表 目 次

第1表 遺物観察表	11
-----------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1 南部台地上部分遺構検出状況・南部台地上部分遺構掘削後状況 北部旧水田部分全景	13
図版2 SX3 全景・SX3 周溝内遺物出土状況・SX3 周溝断面	14
図版3 出土遺物	15

I 前 言

金剛坂里中遺跡は、三重県多気郡明和町金剛坂字里中に所在し、明和町遺跡番号200の周知の遺跡である。西方には祓川が流れ、現況は、畑地・竹林などになっている。

今回の発掘調査は、平成15年度多気停車場齊明線国補緊急地方道路整備事業に伴い実施された。県道多気停車場齊明線は、国道42号線から県道鳥羽松阪線への交通路として重要な機能を果たしている。しかし、現状の県道多気停車場齊明線は、狭くてカーブも多く交通路としては非常に不便である。そのため、この県道の新たなルートの一部として調査対象地が選ばれた。そのルート上には周知の遺跡である金剛坂里中遺跡が所在しており、その確認の為、調査に先立ち平成13年3月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地について遺跡が存在することが確認された。これを受けて、遺跡保存に向けて県土整備部と文化財保護の協議を重ねた。その結果、事業に伴い保存不可能な部分について調査を実施し、記録保存することになった。

(1) 調査日誌抄

- 4月11日 松阪地方県民局建設部と現地協議。
5月16日 発掘調査受託業者（株式会社中部日本鉱業研究所）と現地協議。
6月17日 重機による表土掘削開始。
6月18日 表土掘削中、宮川用水が出管。
6月20日 地区設定を開始。西から東へ10・11・12～の番号、北から南へA・B～のアルファベットの設定。
6月26日 人力掘削開始。壁面清掃の実施。
6月27日 表土掘削終了。遺構検出開始。
6月30日 地区設定終了。
7月7日 南部台地上部分の遺構掘削開始。
7月8日 SK1、SK2遺構平面図作成。
7月9日 SX3の掘削。
7月11日 SX3より弥生時代末～古墳時代初頭の長頸壺が出土。写真撮影後、出土状況図作成。

7月14日	SX5の掘削。
7月16日	南部台地上部分清掃、写真撮影。 北部旧水田部分の遺構掘削開始。 基準点測量。
7月17日	SD6、SD7などの掘削。
7月22日	南部台地上部分の遺構平面図、土層断面図作成。北部旧水田部分清掃、写真撮影。
7月24日	北部旧水田部分の壁面清掃、土層写真撮影。北部旧水田部分の遺構平面図作成。
7月25日	北部旧水田部分の土層断面図作成。
7月29日	調査区の遠景写真撮影。埋め戻し開始。
8月5日	埋め戻し終了。
8月6日	現場事務所の撤去。
8月7日	松阪地方県民局建設部へ現地引き渡し。

(2) 調査の方法

調査区に4m四方の小地区を設定した。西から東へ10・11・12～の番号、北から南へA・B～のアルファベットを配置した。なお、この地区設定は、国土座標とは無関係である。

掘削方法については、表土は重機で、包含層以下、遺構までを人力で行った。

また、調査区全体の平面図及び各土層断面図は、縮尺1/20で作成した。

(3) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

- ・法第58条の2第1項（県教育長宛）
平成15年5月21日付教理第51号（県教育長宛）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛）
平成15年10月28日教委第12-9-1号

II 位置と環境

1 地理的環境

明和町は、多気郡の北東にあり、北は伊勢湾に面している。西は櫛田川の沖積平野が広がり松阪市に、南は多気町・度会郡玉城町に、東は伊勢市・度会郡小俣町に隣接している。町域のはほとんどが平野である。縄文から古墳時代に至る遺跡が散在し、古くから開かれた地域として知られている。

また、地形的には明和町は、三重県内を北流する櫛田川と宮川によって挟まれた洪積台地の西端に位置している。金剛坂里中遺跡（1）は、かつては櫛田川の本流であったとされる支流の祓川右岸の台地上に位置している。周辺には水田や宅地が広がり、北方には県道鳥羽松阪線が通じ、行政区上は三重県多気郡明和町金剛坂字里中に位置する。

2 歴史的環境

ここでは、今回の調査の所在する明和町内を中心に戸周辺の遺跡について時代順に概述する。

（1）旧石器時代

玉城丘陵地域には、いくつかの旧石器の遺跡が分布する。金剛坂里中遺跡南方には、コドノA・B遺跡（2・3）、上村池A・B遺跡（4・5）があり、上村池B遺跡からは細石刃・柳葉形尖頭器など旧石器時代末期の石器が出土している。

（2）縄文時代

玉城丘陵地域の上村池A遺跡では、神子柴型石斧や早期の土器などが出土している。また、斎宮池遺跡（6）からも、磨石や中期末から後期初頭の土器などが出土している。明野原台地上の祓川右岸に位置する金剛坂遺跡（7）から中期末～晩期の縄文土器が出土している。また晩期になると、確認される遺跡数が増え、西出遺跡（8）では人面土版と土器が、粟垣内遺跡（9）などからも土器が出土している。

（3）弥生時代

金剛坂遺跡は弥生時代を通じて展開する遺跡であ

るが、特に前期の亜流遠賀川式土器の出土する遺跡として、東海地方の学史上著名である。また、近年の調査成果では、前期中段階の土器や遺構も確認されている。この他に、粟垣外遺跡（10）・コドノB遺跡・大道A遺跡（11）からは、前期の遺構が検出されている。また、神前山1号墳（12）・上村ウシバ遺跡（13）などでも、亜流遠賀川式の前期土器が出土している。

西村遺跡（14）からは中期の壺が、西出遺跡からは中期から後期にかけての竪穴住居が、斎宮跡（15）からは中期から後期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。また、寺垣内遺跡（16）からは、中期から古墳時代前期の方形周溝墓をはじめ竪穴住居など多数の遺構が検出されている。

北野遺跡（17）からは、後期の竪穴住居が多数検出され、銅鐸形土器製品が出土している。丸山B遺跡（18）、樋口遺跡（19）、六ッ葉広遺跡（20）も後期の遺跡である。

（4）古墳時代

古墳時代になると、明和町内やその周辺に多数の古墳が造営される。5世紀前半に造られた權現山2号墳（21）からは滑石製壇や円筒埴輪が出土している。5世紀中頃に造られた高塚1号墳（22）は全長75mの帆立貝式前方後円墳である。また、神前山1号墳は5世紀後半に造られた帆立貝式前方後円墳で、画文帶神獸鏡が出土している。

その後6～7世紀になると、この付近の古墳も縮小・群集化し、多くの古墳群が造営される。主な古墳群としては、塙山古墳群（23）、坂本古墳群（24）、すでに消滅した織糸古墳群（25）、神前山古墳群（12）、大塚古墳群（26）、河田古墳群（27）、權現山古墳群（21）、高塚古墳群（22）、上村池古墳群（28）、斎宮池古墳群（29）、明星古墳群（30）、曾祢崎古墳群（31）などがある。

このように古墳が密集する地域は、県下では他に類を見ない。この特異な状況が、斎宮を形成する歴史的基盤となつたとも考えられる。

(5) 古墳時代以降

奈良時代から平安時代にかけては、斎王が住んでいた宮殿とその役所からなる斎宮跡があり、国史跡として指定され、現在も発掘調査が進んでいる。

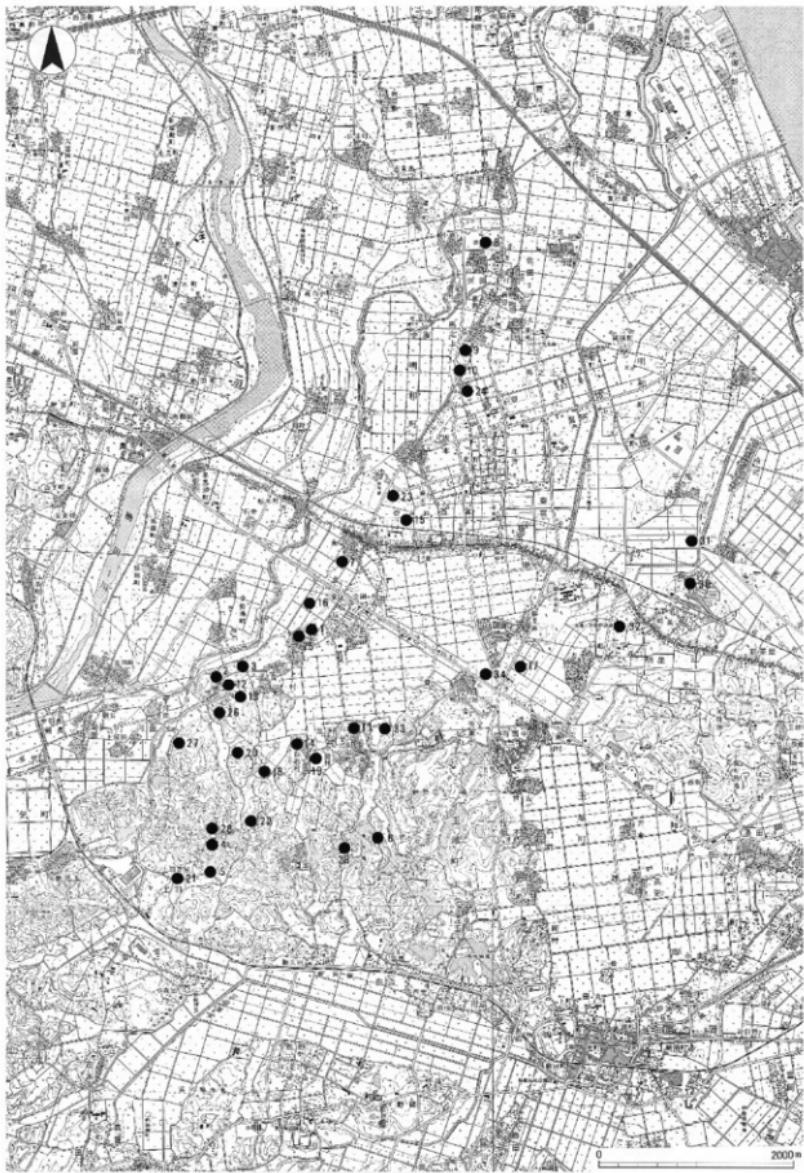
斎宮跡以外では、水池土器製作遺跡（32）、北野

遺跡、戸峰遺跡（33）、堀田遺跡（34）などがある。

これらの遺跡からは土器焼成坑が多数検出されており、伊勢神宮や斎宮への調進土器を生産していたことで知られている。さらに、尾張や美濃などの遠隔地にも供給されていた可能性もある。

〔註〕

- ① 西出季『コドノA遺跡・コドノB遺跡〔第1次〕発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998年)
- ② 下村登良男『河田古墳群周辺の古墳分布』(『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会 1986年)
- ③ 中野敦夫編『明和町遺跡地図』(明和町 1998年)
- ④ 小山憲一『斎宮跡遺跡』(『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報1』三重県埋蔵文化財センター 2000年)
- ⑤ 山澤義貴・谷本聰次『金剛坂遺跡発掘調査報告』(明和町教育委員会 1971年)
- ⑥ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』(1979年) の41頁
- ⑦ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報10』(1980年) の44頁
- ⑧ ⑤の文献に記載されている。
- ⑨ 萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡〔第4次〕・辰ノ口古墳群〔第2次〕発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1999年)
- ⑩ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報9』(1979年) の40頁
- ⑪ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16』(1986年) の49頁
- ⑫ 下村登良男『神前山1号埴生掘調査報告』(明和町教育委員会 1973年)
- ⑬ 高見宣雄『西村遺跡・愛馬遺跡』(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年)
- ⑭ 山澤義貴『吉里遺跡発掘調査報告書C地区』(三重県文化財連盟 1973年)
谷本聰次『吉里遺跡発掘調査報告書D地区』(三重県文化財連盟 1974年)
- ⑮ 中野敦夫『寺垣内遺跡発掘調査概要』(『第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料 1985年)
- ⑯ 岩田憲治『北野遺跡〔第5次〕発掘調査概報』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)
- ⑰ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報10』(1979年)
- ⑯ ⑮の文献に記載されている。
- ⑯ ⑯の文献に記載されている。
- ⑯ 金子延夫『玉城町史』第1巻(1983年)
- ⑯ 下村登良男『神前山1号埴生掘調査報告』(明和町教育委員会 1973年)
- ⑯ 野原宏司『第112次調査』(『史跡斎宮跡平成7年度発掘調査報告』(斎宮歴史博物館 1996年)
- ⑯ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財年報』(1998年) の36頁
- ⑯ ⑯の文献に記載されている。
- ⑯ 伊藤久嗣・吉永康夫『河田古墳群発掘調査報告』(多気町教育委員会 1974年)
- ⑯ 奥義次・下村登良男ほか『明星古墳群発掘調査報告』(明和町教育委員会 1975年)
- ⑯ 西村美幸『曾称崎遺跡〔第2次〕・曾称崎古墳群』(三重県埋蔵文化財センター 1997年)
- ⑯ 伊藤久嗣・伊勢野久好「多気郡明和町堀田遺跡」(『昭和55年県営圃場整備事業城埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年)

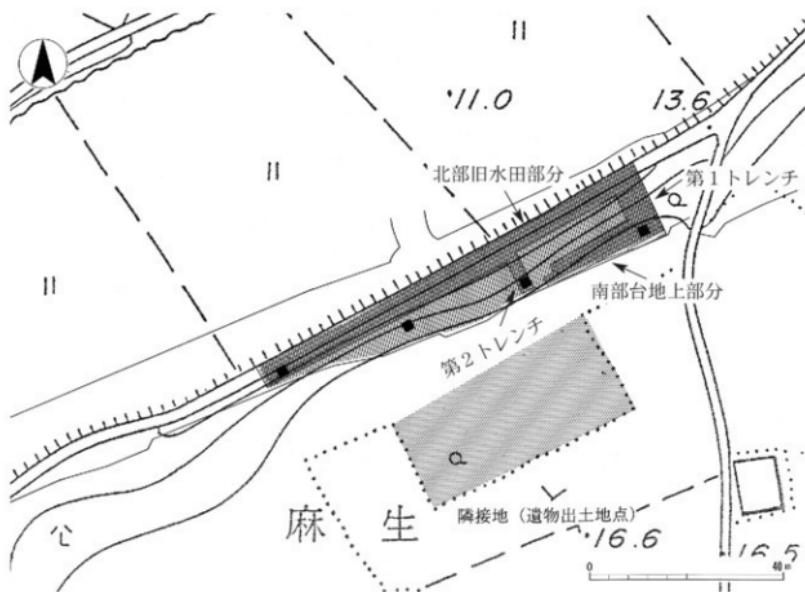


第1図 遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院「松阪」「国東山」「明野」「伊勢」1:25,000から)

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図を複製したものである。(承認番号 平15部復、第268号)



第2図 遺跡地形図（1:5,000）



第3図 調査区位置図（1:1,000）【■ 試掘坑】

III 基本層序と遺構

1 基本層序

調査区は、南部の台地上部分と北部の旧水田部分に位置し、標高は、それぞれ16m前後、10m前後である。

基本層序は、南部台地上部分の調査区では上より第1層：10YR 4 / 1 褐灰色シルト質粘土（表土）、第2層：7.5YR 6 / 6 橙色シルト質粘土（包含層）、第3層：10YR 7 / 6 明黄褐色粘土（地山）となり、遺構検出面は第3層上面である。また、北部旧水田部分の調査区では上より第1層：10YR 6 / 4 にぶい黄橙色シルト質粘土（表土）、第2層：10YR 3 / 3 喀褐色シルト質粘土（耕作土）、第3層：10YR 4 / 4 褐色シルト質粘土（包含層）、第4層：10YR 4 / 3 にぶい黄褐色シルト質粘土（地山）となり、遺構検出面は第4層上面である。

2 遺構

今回の調査では、土坑2基、方形周溝墓2基、溝3条を検出した。以下にその遺構について述べる。遺構の深さは全て検出面からの数値である。

（1）弥生時代末～古墳時代

S X 3

南部台地上部分の南東部で検出した。周溝は最大幅3m・最深部0.7mである。周溝は調査区外へ続くと推定される。埋土は3層に分けられ、上から黒褐色（10YR 2 / 2）シルト質粘土・にぶい黄褐色（10YR 4 / 3）シルト質粘土・褐色（7.5YR 4 / 3）シルト質粘土である。

周溝からは弥生時代末～古墳時代初頭の長頸壺（第8図1）・土師器小片などが出土した。

S X 5

南部台地上部分の南西部で検出した。周溝は最大幅1.4m・最深部0.3mである。周溝は調査区外へ続くと推定される。埋土は黒褐色（10YR 2 / 2）シルト質粘土である。

周溝からは土師器小片がわずかに出土したが、土

器からは時期不明である。しかし、S X 3と共に通する埋土があることから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

（2）中世以降及び時期不明

S K 1

南部台地上部分の南東部で検出した。長方形を呈し、規模は東西1.8m・南北1.4m・深さ0.2mである。調査区外へ続くと推定される。埋土は黒色（10YR 2 / 1）シルト質粘土である。

埋土からは土師器小片がわずかに出土した。土器からは時期不明であるが、SK 2よりは新しい。

S K 2

南部台地上部分の南東部で検出した。長方形を呈し、規模は東西2.1m・南北1.2m・深さ0.3mである。埋土は3層に分けられ、上から黒褐色（10YR 3 / 2）シルト質粘土・にぶい黄褐色（10YR 4 / 3）シルト質粘土・黒色（10YR 2 / 1）シルト質粘土である。

埋土からは土師器小片がわずかに出土した。土器からは時期不明である。

S D 4

南部台地上部分の南東部で検出した。溝は東西に延び、最大幅0.6m・最深部0.5mである。埋土は褐色（10YR 4 / 4）シルト質粘土である。

埋土からは土師器壺・瓶などが出土したが、畑の区画溝の可能性があり、近世以降の遺構であろう。

S D 6

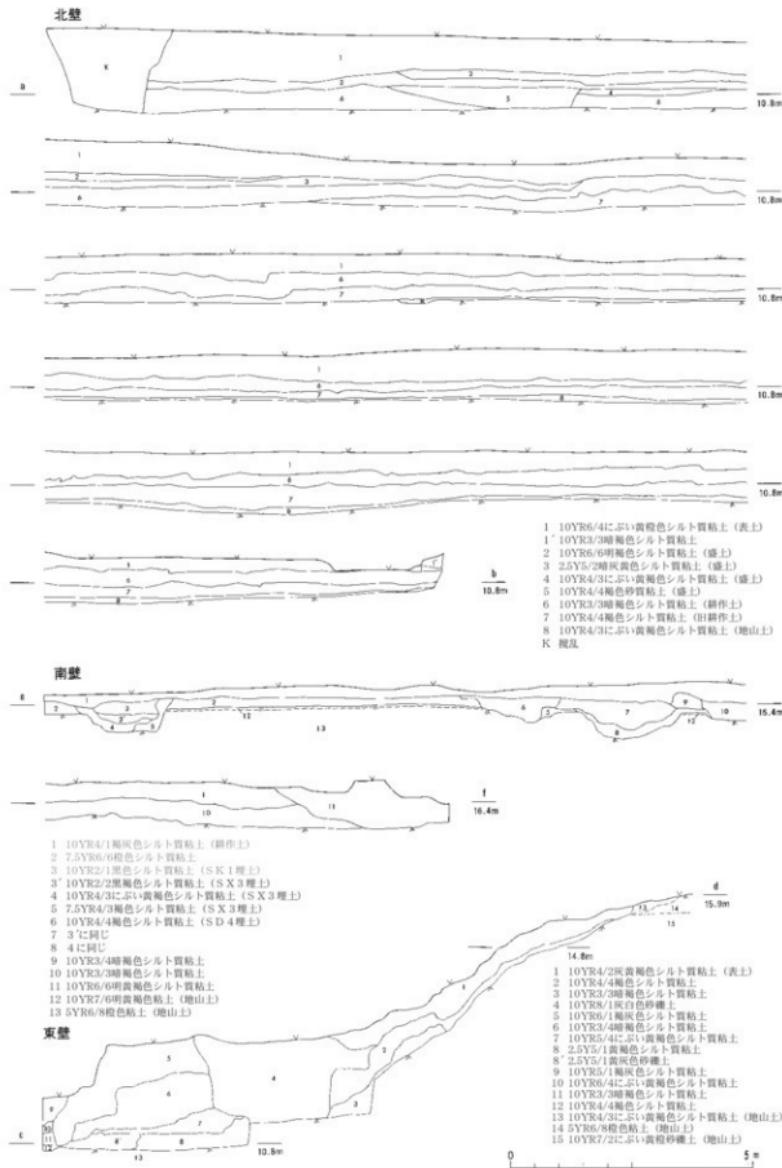
北部旧水田部分のほぼ中央部で検出した。溝は東西に北部と南部に分かれて延び、最大幅1.0m・最深部0.3mである。埋土は灰黄褐色（10YR 4 / 2）シルト質粘土である。

埋土からは山茶碗などが出土したので、中世～近世の遺構であろう。

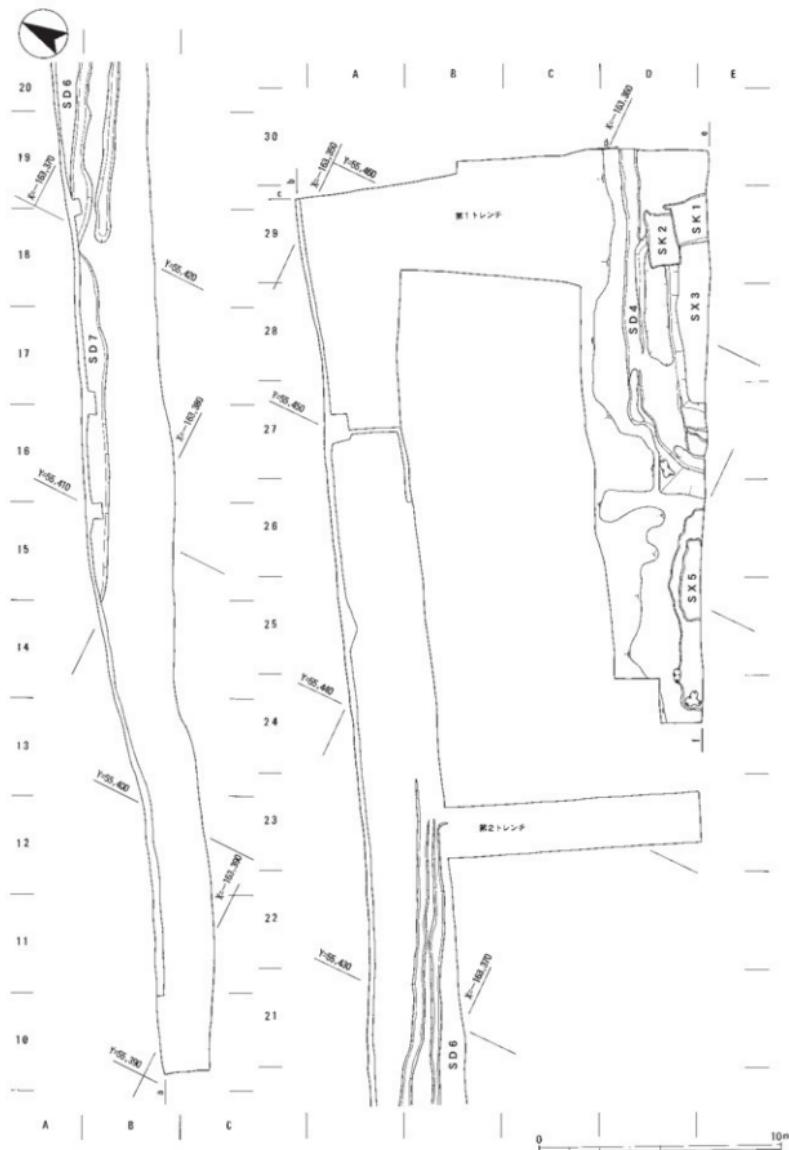
S D 7

北部旧水田部分のSD 6の西側で検出した。北壁に接するように延び最大幅1.0m・最深部0.1mである。埋土は褐色（10YR 4 / 4）シルト質粘土である。

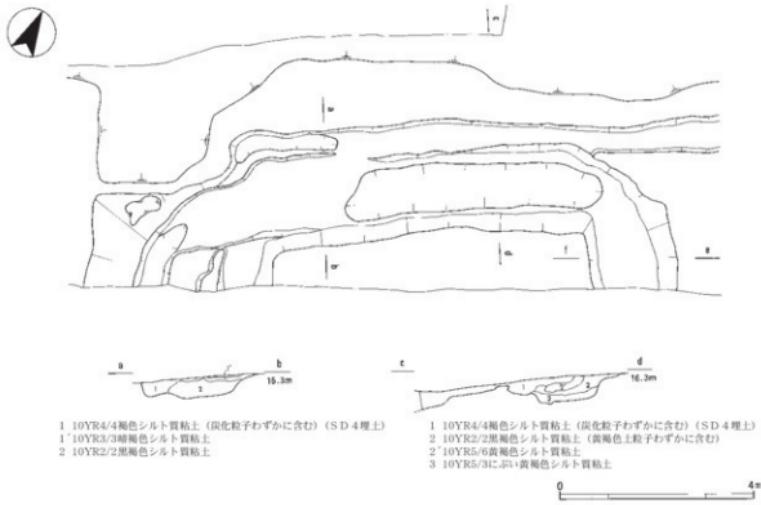
埋土からは土師器小片がわずかに出土した。土器からは時期不明である。



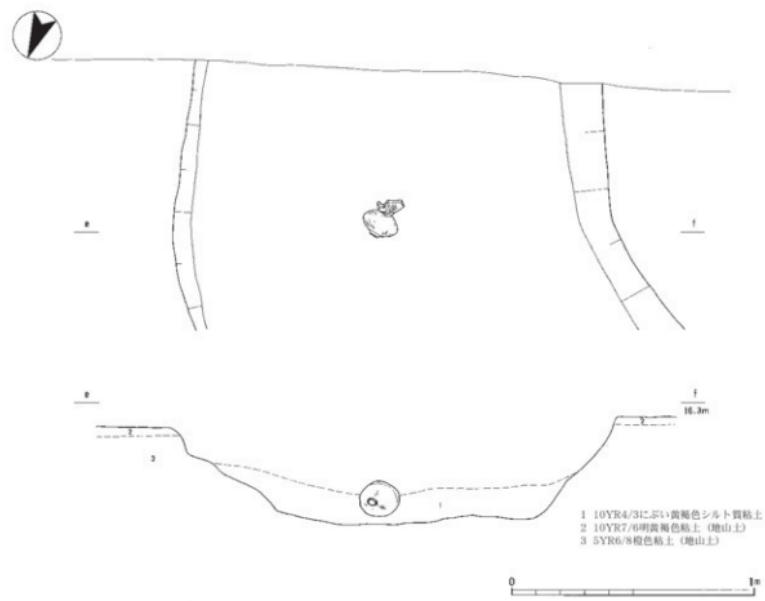
第4図 土層断面図（1:100）



第5図 遺構平面図（1:200）



第6図 S X 3平面図・断面図 (1:100)



第7図 S X 3周溝内遺物出土状況図 (1:20)

IV 遺 物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして11箱であった。これらの遺物は、縄文時代・弥生時代末～古墳時代・古代（飛鳥時代～奈良時代）・中世以降に分類される。以下、特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

（1）縄文時代の遺物

縄文土器 深鉢（2）

遺構検出時に包含層より出土した。外面に二枚貝によるものと思われる条痕を施し、口縁部下に貼付突唇が這っている。内面はナデ調整されている。摩滅が激しいが、縄文晩期の土器であると考えられる。

（2）弥生時代末～古墳時代の遺物

土師器 壺（1）

S X 3 の下層よりほぼ完形で出土した。口縁部にハケ後ミガキが施されている長頸壺（瓢壺）である。頸部は横ナデが施されている。体部にもハケやミガキがていねいに施されている。内面にも細かいハケメや指オサエが施されている。弥生時代末～古墳時代初頭の土器である。

土師器 壺（7）

調査区の隣接地より出土した。頭部には、貼付突帯と櫛描直線文が施されている。内面は摩滅が激しいため、調整痕はわずかにナデが残る程度である。

土師器 高杯（8）

調査区の隣接地より出土した。脚部のみが残存し、「八」の字を描くように緩やかに外方に広がっている。外面に櫛描直線文が施され、内面にもていねいな板ナデが施されている。

土師器 豆（9）

調査区の隣接地より出土した。台付豆の台部のみが残存している。被熱による劣化変色が著しく、内面はオリーブ黒色になっている。内外面ともにナデ調整が施されている。

（3）古代（飛鳥時代～奈良時代）の遺物

土師器 豆（3）

遺構検出時に包含層より出土した。口縁部にナデ調整が施されて、口縁端部はやや上方に肥厚する。内面には横方向に細かいハケメが施され、外面にも縦方向にハケメが施されている。色調は浅黄橙であり、胎土はやや密である。奈良時代の土器であると考えられる。

土師器 高杯（4）

遺構検出時に包含層より出土した。脚部は脚下部から広がっており、端部には沈線が這っている。内外面ともに横ナデで調整がされており、外面には縦方向にハケメが施されている。

土師器 豆（5）

遺構検出時に包含層より出土した。貼り付けによる把手を持つ体部片が残存している。内面はナデ及びオサエで調整されており、外面には縦方向にハケメが施されている。当遺跡からはこれとは別個体のものが他に数点出土している。

土師器 杯（10）

調査区の隣接地より出土した。口径11.0cmで器高3.5cmの浅い杯である。口縁端部は横ナデ調整されており、内面はナデ調整されている。外面はオサエによる凹凸が見られる。浅黄橙を呈し、胎土は密である。奈良時代の土器であると考えられる。

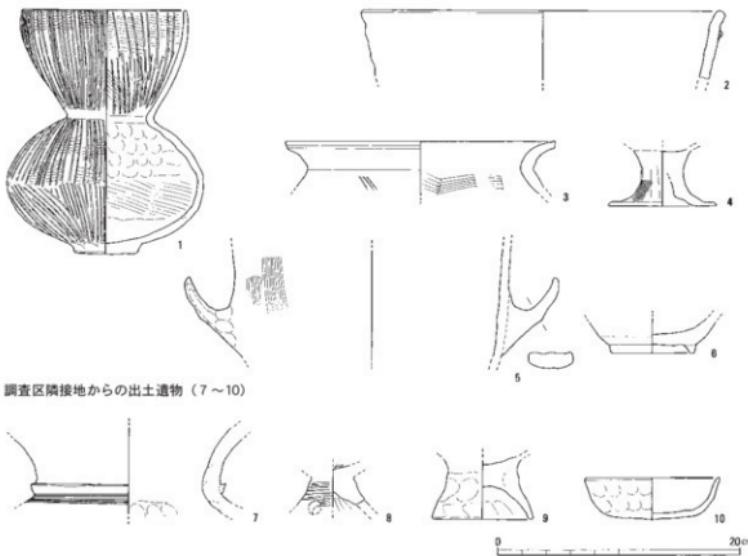
（4）中世以降の遺物

陶器 山茶碗（6）

遺構検出時に包含層より出土した。体部は外面がロクロナデ、内面も磨耗が見られるがロクロナデと思われる。底部は糸切り痕が見られ、高台貼り付け及び貼り付け後ナデの技法が用いられている。又、高台には砂粒痕が認められる。涙美産と考えられる。

S X 3 (1)

包含層出土遺物 (2~6)



第8図 出土遺物実測図 (1:4)

番号	実測 番号	遺構号	小地区 (グリッド)	器種 形態	付 属 部 品	重 量 (g) 口径 基底 その他	調整技法の特徴	色 調	粘 土	焼 成	残存度	備 考	
1	301	SX3	E29	土器器 皿	—	13.6 20.1	外: ハケメ・ヘラミガキ 内: ハケメ・指オナエ	縦(1.5H6/6)	やや密	良	ほぼ完形		
2	101	包含層	A27	圓文土器 深鉢	—	29.5	—	外: 口縁部ナデ・他は柔 軟、内: ナダ	縦(1.5H5/3) 内: にぶい黄褐色(1.0H5/4)	粗	良	口縁部1/12残	
3	203	包含層	B28	土器器 皿	—	22.0	—	口縁部押ナデ 他はハケメ	浅黄褐色(1.5H8/4)	やや密	良	口縁部1/6残	
4	201	包含層	B14	土器器 皿	—	—	基底 3.5	外: ハケメ 内: 横ナデ	灰白(1.0H8/2)	やや密	差	脚部1/2残	
5	102	包含層	B28	土器器 皿	—	—	体形 22.7	外: ハケメ・貼付ナダオ サニ、内: ナダ	浅黃褐色(1.5H8/4) 内: にぶい緑(1.5H2/4)	やや密	良	把手部残	
6	202	包含層	B21	高台 山茶鉢	—	—	高台 5.8	外: ロクロロダ・貼付後 ナダ、内: ロクロロダ	灰白(1.5H7/1)	やや密	良	高台部完存 底面に砂粒痕 底面に糸切り痕	
7	401	—	隣接地	土器器 皿	—	—	瓶形 16.4	外: 貼付ナダ・模様清潔 内: ナダ	にぶい黄褐色(1.0H7/3)	2mmの纏合	良	面部1/6残 摩滅が激しい	
8	403	—	隣接地	土器器 皿	—	—	脚付 3.5	外: 模様底織文 内: 貼付ナダ	縦(1.5H6/6)	2mmの纏合	良	脚部完存	
9	402	—	隣接地	土器器 皿	—	—	脚付 8.2	ナダ	外: 浅黄褐色(1.0H8/2) 内: オリーブ色(1.0H1/1)	5mmの長石 含	良	脚部完存 細熱による劣化色変	
10	404	—	隣接地	土器器 皿	—	11.0 3.5	—	外: 横ナダ・オサエ・ナ ダ 内: 横ナダ・ナダ	浅黄褐色(1.0H8/4)	粗	良	口縁部1/2残	

第1表 遺物観察表

遺物觀察表　　凡例

遺物觀察表については、以下のような方法によって表記している。

番号：図版に対応する番号である。

実測番号：実測図作成段階での番号である。

遺構等：遺構から出土したものについては遺構を、包含層からのものについては包含層を表記している。

小地区：調査区のグリッド（4m×4m）である。

器種器形：縄文土器・土師器などの別と、器種（壺・甕・杯）などを記した。

調整技法の特徴：調整時に生じた特徴的な事項を含め、簡単に記した。

色調：『新版標準土色帖』（小山・竹原編　9版1989年）を基準とした色調を表記した。

胎土：粗密などを表記した。

残存度：口縁部・高台部などの残存の度合いを分数で表現した。

備考：土器に見られる特徴的な要素などを記した。

V 結　語

今回の多気停車場齊明線国補緊急地方道路整備事業に伴う金剛坂里中遺跡の調査は、祓川流域における重要な位置を占めている遺跡として注目されるものであった。金剛坂里中遺跡は、金剛坂の丘陵地縁辺部分に位置し、丘陵周辺には、多くの遺跡が存在している。今回の調査では、縄文時代から中世までの遺物を確認することができた。ここでは、今回の調査結果のまとめと若干の検討を行う。

縄文時代については、深鉢片が出土したが、全体を知ることのできる遺物や遺構も確認できなかったが、当遺跡又はその周辺に居住跡の存在する可能性もある。

弥生時代末～古墳時代については、今回の調査で、S X 3・5 の 2 基の方形周溝墓が確認された。S X 3 は、弥生時代末～古墳時代初頭の土師器壺（長頸壺）が周溝から出土していることから、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と考えられる。S X 5 も埋土が S X 3 と共通する部分があることからほぼ同時期の遺構と考えられる。また、この 2 基については、調査区内では巡っているが、調査区外で陸橋をもつ可能性も考えられる。当遺跡周辺の遺跡でも、コドノ B 遺跡、金剛坂遺跡（第 5 次）^① 等で、陸橋（中央

陸橋型）を持つ方形周溝墓が検出されている。祓川流域の遺跡における方形周溝墓は南東方向に開口部をもつ「中央陸橋型」のものが多い傾向がみられる。

古代の遺物については、土師器甕・高杯・甌等が出土したが、いずれも包含層からの出土であり、遺構としては確認できなかった。しかし、調査区の隣接地より奈良時代の土師器甕が出土していることから、当遺跡又はその周辺に古代の遺構が存在する可能性もある。

中世の遺物については、包含層から山茶椀が出土した。平成13年度に実施された当遺跡の範囲確認調査においても中世の土師器皿片が数点出土していることから、当遺跡が中世まで存続していた可能性もある。

金剛坂里中遺跡は、東西90m×南北50mの丘陵地上の遺跡であるが、今回の調査区は周知の遺跡範囲のほぼ北端に位置する。発掘調査により方形周溝墓や溝跡を検出したが、この方形周溝墓や溝跡が遺跡のほぼ北端であり、今回の調査では、金剛坂里中遺跡の北端部を確認できたと考えてよいだろう。さらに、この遺跡の性格を明らかにするために、今後の発掘等の調査に期待したい。

〔註〕

① 西出季『コドノ B 遺跡〔第 2 次・3 次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2000 年）

② 奥野実『金剛坂遺跡〔第 5 次〕・辰ノ口古墳群〔第 3 次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2001 年）

図版 1



南部台地上部分遺構検出状況（東から）



南部台地上部分遺構掘削後状況（東から）



北部旧水田部分全景（東から）

図版 2



S X 3 全景（東から）

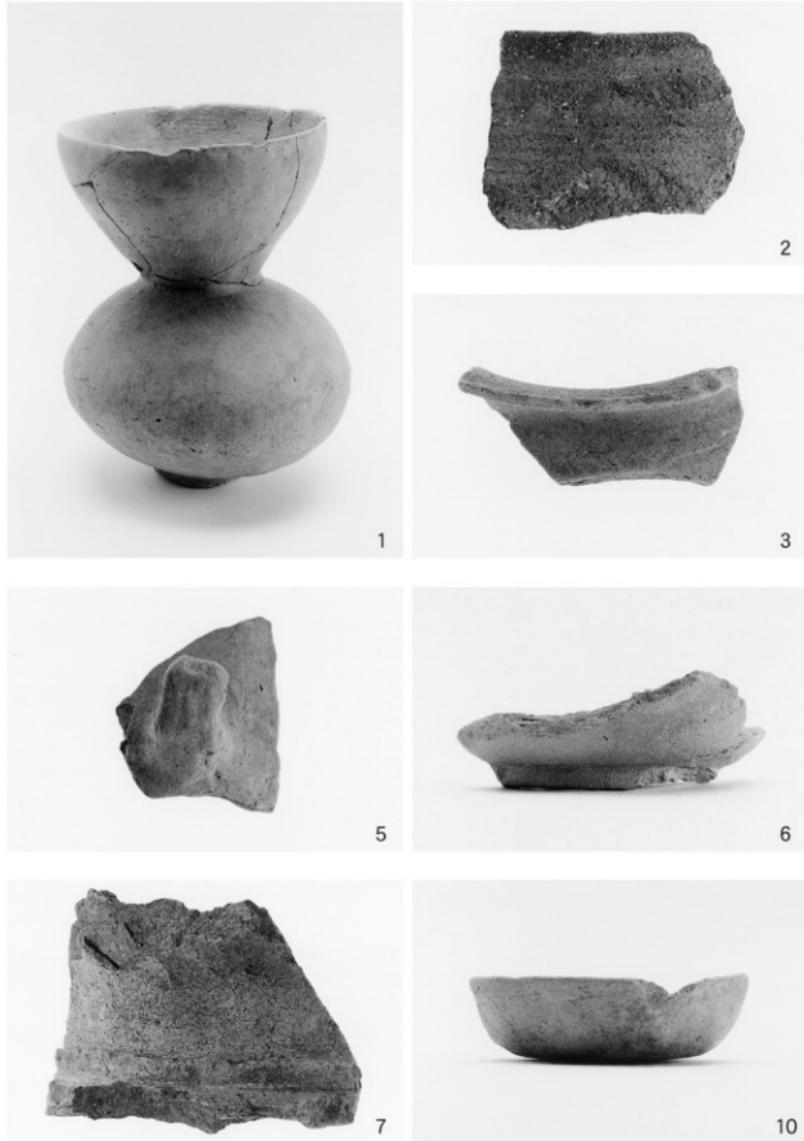


S X 3 周溝内遺物出土状況（北から）



S X 3 周溝断面（西から）

図版 3



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こんごうさかさとなかいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	金剛坂里中遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	251							
編著者名	辻本 泰宏							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 Tel 0596 - 52 - 1732							
発行年月日	2004(平成16)年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こんごうさかさとなかい 金剛坂里中 遺跡	みえけんたきゅうぶ 三重県多気郡 明和町金剛坂 字里中	4 4 2	2 0 0	34度 31分 32秒	136度 36分 13秒	20030516 ~ 20030807	961 m ²	平成15年度多 気停車場齊明線 国補緊急地方道 路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金剛坂里中 遺跡	集落跡	古墳時代	方形周溝墓 土坑 溝	土師器	弥生時代末~古 墳時代初頭の方 形周溝墓を検出			

三重県埋蔵文化財調査報告251

金剛坂里中遺跡発掘調査報告

2004（平成16）年3月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 有限会社 山 文 印 刷
